名もなき異界の花たちへ

中山 愛望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名もなき異界の花たちへ

【Ｎコード】
Ｎ１０７２Ｔ

【作者名】
中山　愛望

【あらすじ】
天下は麻のように乱れる戦国の世――異世界の島国、日ノ本は百年を超える戦乱で荒廃していた。
異界の少女・蒼月（アオツキ）、異界へ漂着した十四歳の少年・ユウキ――二人が出逢い、成長してゆくことで、歴史は動き始める。
「七度生まれ変わっても――必ず、君を見つけ出してみせる」
時を超え愛し合う人々が、戦乱の世に希望をもたらそうとする姿を描く、

戦国風異世界ファンタジー。

００１　『明星の誓約』（前書き）

不定期更新……のんびり更新致します。

中山愛望　拝

００１　『明星の誓約』

むかしむかし、あるところに――子供たちのお話をねだる声が暖かい夜具の中で響く時、まるで眠りへいざなう呪文のように、この言葉が世界のどこかで母の唇から発せられる。
それは人が母から生まれ出る存在である限り、続けられてゆくであろう営み。
子はやがて親となり、自分が語られたように、子供たちに語り始める。

むかしむかし、あるところに――そして初めて与えることが出来た時、やっと気付くのだ。自分が深く愛されていたという事実に。

たとえ私たちが行く術のない世界であったとしても、それはおそらく変わらない。人々は出逢い、物語が生まれ、歴史は紡がれる。そして親から子へ語り伝えられてゆく。その無数に存在する世界の惑星の一つで紡がれた、ある物語を語り始めよう。

西暦１６世紀、日ノ本という小さな島国が百年を超える戦乱のさなかにあった。

その星に暮らす人々が”戦国の世”と呼ぶその時代――大帝という貴族を統べる王の血脈は絶えて久しかった。
各地を支配していた武士の才長けた者は大名と呼ばれ、我こそが次なる時代の支配者だと覇権を競い、猫の額ほどの土地のために争いに明け暮れていた――狂乱と血、憎しみと不信の時代。

強者が弱者の生血をするような悲劇が各地で繰り返されていた。

夜盗が蔓延り、家臣が主を討って新たな支配者となる。昨日の友は明日の敵へと変わり、親兄弟が骨肉の戦いの末、殺しあうことが珍しい出来事ではなかった。

どんな親しい仲であろうと、油断すれば寝首を掻かれる。騙される者が悪い――“下克上”の世である。

言うまでもなくそのような世のことだ、民は雑草のように踏みつけられていた。

戦(いくさ)の度に夫や息子たちが駆り出され、再び戻ることはなかった。雨漏りが絶えぬあばら家と田畑を焼き払われ、残された妻と幼い子供はおろおろと涙を流し、泥のように眠った。

……夢の中でだけ、ささやかな幸福を噛みしめることできる。

戻らなかった夫、息子たちと風に波打つ金の稲穂の中で働き、豊作を仏と大地の神に感謝する。しかし目が覚めれば――哀しみという色に塗りつぶされた現実が待っている。

全ての民が、ささやかだか切実な願いを渇望していた。

「戦いの無い、平和な暮らしを」と。

夜明け前は最も暗いという。戦乱が百年を超えると、人々の哀しみと絶望は、いつしか一つの願いと祈りに変わった。

『この世に救いの主を――慈愛溢れる菩薩(ぼさつ)を降臨(こうりん)させ給え』

数え切れぬ命が失われたが、その度に祈りは親から子へと受け継がれた。そして――遂に祈りが天に届く日がやって来た。

選ばれた者が“声”を聴いたのだ。

“声”を聴いた者は屈強な青年、武士ではなく――美しい少女だった。

◇▼◇▼◇▼◇

十四歳になる一人の少女の命が尽きようとしていた。名は蒼月（あおつき）と言う。

少女は死病に侵されていた。

肺が蝕（むしば）まれて吐血し、ぼろ切れのように捨てられ死ぬ、労咳（ろうがい）という病である。

荒廃した都にある崩落した橋の下で粗末なむしろをひき、顔の崩れた病人たちに混じり、彼女は熱にうなされていた。

そこは捨てられた者たちが集まることを許された、唯一の場所であった。

落ちぶれ果て、食うに困る身の上とはいえ、世が世ならお姫（ひい）さまと呼ばれる高貴な貴族の娘である。

小さな胸を激しく上下させ、息も絶え絶えな哀れな姿であった。

少女は幼き日から糠(ぬか)で肌を磨き、音曲(おんぎょく)・詩歌(しいか)、舞の修行に専心していた。この世に溢れる美をその身に掴むこと――それが父なる人の願いであったからだ。その甲斐あって少女は蒼い月と称えられるまでに美しく成長し、有力な大名から側室に望まれるまでとなった。

しかし輿(こしい)入れの日取りが決まり、父なる人が手を打って酒を飲んだ夜、少女は薄い唇から、椿の花より紅い血を吐いた。

皆から宝玉のように扱われていた娘の境遇は一変した。

死病に侵された少女は、父なる人にとって価値は失われてしまった。大金を得ることが出来る商品どころか、厄介者となってしまったのだ。

床(とこ)に臥(ふ)せった少女は、ほどなく熱病に罹り急死した――と父なる人に取り計らわれた。
夜が更けてから、夜盗さえ近付かぬ忌み嫌われる橋の下に、家来よって置き去りにされたのだ。

それでも蒼月は孤独ではなかった。
臥せっていることしか出来ぬ彼女の世話を、顔の崩れる病を持った人々――“捨てられた民”の者たちが交替で行ってくれたからだ。

ここに捨てられた当初、辺りに漂う異臭と、ぼろ布を被った人々の姿に、蒼月は怯(おび)えた。自分は地獄の中に、ごみのように捨てられたのだと涙を流した。

しかし死病の身である自分を恐れず、額に手ぬぐいを当てて冷やしてくれる老女、水を飲ませてくれる男、わずかな粥を匙で口に運んでくれる自分と変わらぬ年の少女――それらの者たちの目が深く澄み、限りなく優しいことに気付いた。

蒼月は胸を衝(つ)かれた想いだった。自分は美しいとされているもの――それを我が身に宿すことだけを考えて生きてきた。

（これまで物乞いを何度か目にしたことがあったけれど、
その醜さが病のように我が身に降りかかるようで、ただ恐ろしかった――私はなんと愚かだったのでしょう）

「あり……がとう……ございます」
勇気をふり絞って蒼月がか細い声で呟くと、捨てられた人々は目で笑いかけてくれる。
蒼月は言葉を失った。驚いたのだ。美しい、と思った。まるで慈愛溢れる仏さまのようだと。

蒼月はずっと解けなかった問いへの答えをやっと体得したように感じた。

物心が付いてから一日も信心を欠かさず、母の菩提(ぼだい)を弔ってきた。
父なる人のために、孝行な娘であろうと努めてきた。
一身に世が平和であるようにと金色の仏様に祈った。

しかしどんなに熱心に祈ろうとも、黒金(くろがね)に金箔を施した仏様は自分に何も答えてくれることはなかった。世の争いが治まる様子も一向にない。

（仏さまは、鉄に宿るものではないんだわ。

人に――人の心に宿るものなんだわ。
人を哀れみ、愛する心が仏さま。私はなんと愚かだったのでしょう。
私は何も見ていなかった。
何も――見えていなかったのだわ。
でも――気付いても遅すぎる。もう私の命は尽きようとしているのだから。
でも再び生まれ変わったなら、私は――）

熱い火が胸に宿り、蒼月の意識が薄れてゆこうとしていた。
捨てられた人々が集まり、自分の手を取ってお経を唱えてくれている。
嬉しい、有難い、と思った。自分は決して独りではない。
父なる人に捨てられ、一人で死なねばならぬ身なのに、こんなにたくさんの仏さまに囲まれている。
自分は、もうこの人たちに何の恩返しも出来ない。せめて微笑もう、と蒼月は思った。微笑んで死ぬことだけが、自分の出来る唯一のことだから。

「ありが……とう」

蒼月の息が絶えようとした時、不思議な雪が降り始めた。羽毛のような形をした不思議な雪――肌に、地面に触れると、たちまち結晶が弾けるように溶けてしまう降り積もらぬ雪。
蒼月を取り囲む“捨てられた人々”の全身に、焼かれるような痛みが、雷のように刹那貫いた。
『全ての物質は、想いが形を成したもの――全ての祈りを――誓願（せいがん）の成就のために――希望は――東から出ずる』

薄れゆく意識の中で、蒼月は明星のような煌く星から声を聴いたような気がした。
やがて胸で燃えていた火が鎮まり、暖かい光が宿り、呼吸が安らかになってゆく――そして安らかな眠りが訪れた。

羽毛のような雪が止み、辺りを静寂が包んでいる。
蒼月の様子を見守る人々に喜びの涙が溢れた時、捨てられた人々はお互いの無残に崩れ落ちていた皮膚が、子供のように美しい艶を取り戻していることに気付き、腰を抜かさんばかりに驚いた。

「この美しい御方は……きっと菩薩さまの生まれ変わりに違いない」
「おお……ありがたや――これで妻と子の元に戻ることができる……」

その日、長い夜が明けようとする前、まるで少女を祝福するように、東の空に一際（ひときわ）激しく明星が煌（きらめ）いていた。

002

人生という物語は、出逢う人々によって大きく運命が変転する。

人々は出逢うことで、何かしらの影響をお互いに及ぼし合い、変化してゆく。

彼らは、また違う誰かと出逢い――そういった変化が限りなく繰り返され伝播（でんぱ）してゆくことで、新しい歴史は紡がれ――いつしか世界そのものが変わってゆく。

たとえ、はっきりとした形で人の目に映らないとしても、星の裏側で舞う蝶の密やかな羽ばたきが、竜巻の発端になる可能性は確かに存在する。

翌朝、蒼月は目覚め、深呼吸をしてから眼前に広がっている世界を眺めた。

それは彼女にとって意味深いものだった。彼女は文字通り、自分が生まれ変わったように感じていたから。

鉛のように重かった身体は羽のように軽く、胸に広がっていた火のような熱さは、すっかり消えてなくなっていた。

（――なんて美しいのかしら）

目の前に広がる小川に金粉のような光が煌いてこぼれている。蒼月はその照り返す光に目を細めた。いつのまにか自然に微笑していた。愛しい、と思った。

かつて、これほどこだわりのない心で、世界を眺めたことがあったろうか、と蒼月は思いを巡らせる。

無論、なかった。意識したことはなかったが、彼女は父なる人の

願いのためだけに生きていたから。しかしもう生まれ育った屋敷に戻るつもりはなかった。

自分は愛した者――父なる人に捨てられた。哀しみや寂しさが全く無いといえば嘘になる。でも、と蒼月は思う。だからこそ分かったことが、見えたものがあった。再び生まれ変わったなら、私は――。

『この戦乱の世で悲しみ、苦しんでいる人々に――少しでも、希望を与えることができる者になりたい――』

小川を静かに眺めている蒼月の周りに、ぼろをまとった”捨てられた人々”が集まり、手を合わせ始めていた。涙を流している者さえいる。

「菩薩さまのおかげで、このじじいの崩れた身体が、ほらこのように――すっかり元通りになりましたぞ」

「ありがたや、わしらもこのように――」

ぼろ頭巾を取り去った人々の顔を確認して、蒼月は目を見開き、驚いた。老人を抱きしめると、知らず知らず熱い涙が頬を伝っていた。

「いいえ、私などの力ではありません。きっと――仏さまの御慈悲のおかげです。蒼月と申します。みなさん――本当にありがとうございました」

たおやかに頭を下げると、ぼろ布をまとった人々の顔が喜びで輝いている。人々の笑顔を見て、美しい、と蒼月は思った。

人々の輪を掻き分け、息を弾ませて蒼月に駆け寄ってくる少女がいた。虫の息だった自分に、木の匙で粥を与えてくれた少女だと気付いて手を取って礼を言おうとすると、沁み一つない美しい肌をした顔が青褪めている。

「菩薩さま――傷ついて死にそうな男が行き倒れています！　早くこちらに！」

“捨てられた人々”は血相を変え、蒼月の白い手を取って駆け出す少女の後を追った。

唐突に、晴れ渡っていた空に稲光を孕んだ不吉な黒雲が湧き、激しい雨が降り始めていた。

◇▼◇▼◇▼◇

大和勇気が、日ノ本と呼ばれる異世界で、蒼月と呼ばれる少女と出会ったのは、中学二年生――十四歳になった日のことだ。

「――熱がありますね。今日は眠ってらっしゃい」

たしか生まれ育った故郷の暦ではショウワといったろうか。

母は短く刈り込まれたユウキの坊主頭を撫で、額に固く絞ったてぬぐいを当てた。井戸水のひんやりとした冷たさがそのまま運ばれてきたようで、火照った体に心地良い。

運ばれてきた漆塗りの盆の上には、お粥が湯気を立ち上らせていた。

甘い香り――配給の食料はかなり乏しくなっていたが、サツマイ

モがたっぷりと入った白米の粥を母はユウキに用意してくれた。桐の箪笥から、また母の着物が一着無くなっていることだろう。

「しっかり食べないと、力が出ませんよ」

母はそう微笑して言い、部屋を出て行った。一口も食べようとしない。もんぺ姿のほっそりとした体が、日に日に小さくなってゆくように見えた。

ユウキの父は誇り高い帝国海軍の砲兵士官であり、巨大な戦艦に搭乗して御国のために戦っている。

「留守の間、母さんを――頼むぞ」

出征する際、日に焼けた父の笑顔と言葉が思い出され、“銃後の護り”を任された自分がこのように熱を出して寝込んでいることが不甲斐無く、ユウキは申し訳ない気持ちだった。

（もう8月6日か――）

蝉が競うようにかしましく鳴き始めている。

戦争はもう何年も続き、皇軍はずっと勝ち続けていた。

しかしいつの頃からだろうか――“転進”という言葉が使われ始めると、敵国の大型爆撃機があるゆる主要都市に焼夷弾を撒き散らし始め、国中を焦土に変えてしまった。

『欲しがりません勝つまでは』という団結と犠牲を強いるスローガンが、

『一億総玉砕』という言葉に変化しつつある。

どうして勝ち続けている帝国臣民が玉砕（ぎょくさい）しなければならないのか？

愛国心に満ちた帝国軍人の息子であるユウキの心にさえ、そんな疑問が芽生え始めていた。

中学に入学してからというもの、授業は休みになっている。
ユウキは市外の西部にある工場に動員され、旋盤で金属を削る訓練を受けていた。御国のため、戦闘機の部品を製造するためである。しかし材料となる金属材料が枯渇していたため、その日、工場は休みとなった。

7時過ぎに、けたたましいサイレンで警戒警報が発令されたが、30分も経たないうちに解除となった。ラジオから、敵の爆撃機は全機引き返したという知らせを聞いた。

高い熱で頭が少しぼうっとしていたが食欲は旺盛だった。眠っていると食べ物のばかり夢に出てきた。両親に連れられ、銀座で食べた御子様ランチ――丸々と太ったホクホクの大きな海老フライ――そんな子供じみた夢をユウキは恥じてさえいた。

お粥を残さず平らげると、前夜から断続的に続いた空襲警報でよく眠れなかったせいか、まぶたが重くなってきた。

布団に横になり、ユウキはぼんやりと晴れ渡った夏の青空を見ていた。

国中の都市という都市が激しい空襲の被害にさらされているというのに、この街は全くと言ってよいほど被害を受けていない。
（何故だろう？）

そんな疑問が頭の片隅を過ぎった。
ふと時計に目をやると8時15分になろうとしていた。

「ユウキ！　逃げなさい！」

台所に向かった母が唐突に鋭い叫び声を上げた。母の声が終わらぬ間に――“何か”が起きた。

その瞬間まで、人類の誰も経験したことのない光――

虹のような美しい鮮やかな光――

目くるめく閃光が炸裂し、視界全体――世界が白光に包まれた。

全てを薙ぎ倒す、地響きのような衝撃音――

本能的に、閃光が圧倒的な死を孕んだ何かなのだと、ユウキは直感した。

（逃げなきゃ――出来るだけ遠くへ――）

ユウキは飛翔した。粉々に吹き飛ばされてゆく自室の二階から。

（もっと、もっと遠くへ、逃げなきゃ――）

力を振り絞りユウキは更に飛翔しようして――そこで意識は途切れた。

……未だに、自分の身に何が起きたのか、正確に理解していない。

たしかなことは、自分が今居る場所は、ショウワという暦が使われていた故郷――祖国ではないということだ。

ユウキが次に覚えているのは、顔に降りかかる雨――背中に伝わる泥の冷たい感覚。
仰向けに倒れていたから、のっぺりとした灰色の空が見えた。

まるで膨らまそうとする風船が破れてしまったように、呼吸をしようとしても肺から空気が抜けてゆくようで、ひどく苦しかった。
必死で息を吸い込もうとすると、笛のような音が口から漏れ出た。激しい咳をすると血の混じった唾が出た。
（僕は、まだ死にたくない）
誰かが、自分の手を握った。
（お母さん！）

自分を覗き込んだ顔は母ではなかった。白い肌、艶やかな黒髪――明星が遷移（せんい）したような不思議な瞳を持つ、美しい少女だった。

『――もう大丈夫です』
自分の喉に触れた白い手から、想いが流れ込んできた。

『僕は、まだ死にたくない――生きたい。死ぬのは怖い――僕はまだ何もしてない――だから――生きたい』

死の恐怖に怯えて錯乱（さくらん）し、少女にそんなことを何度も訴えかけていた。
少女はその度に「大丈夫、大丈夫です――私たちはあなたのそばにいますから」と宥（なだ）めるように頷いた。

当てられた少女の手から、熱がじんわりと首から胸へと伝わってくる。呼吸が楽になり始めると意識が混濁し、濃密な――しかし安らかな闇が訪れた。

何もない闇が――。

003

百名余りの人々は、降り出した雨で泥へと変わった地面の上に、仰向けに倒れている裸身の少年の姿を認めた。口許（くちもと）は、吐き出した血でべっとりと汚れている。

懸命に少年へ呼びかける蒼月の横で、うずくまって少女が泣いていた。

中年の逞（たくま）しい体躯（たいく）の男が進み出て少年を抱え上げようとしたが、差し伸ばした手を止め、首を横に振った。少年の背中には、黒い大蜘蛛が足を広げたような火傷が広がっている。

「これじゃあ……とても助かるまい。おそらく肺腑（はいふ）をやられておる。おおかた、どこぞの悪党になぶられたのだろう。むごいことを……」

少年は意識が朦朧としているのか、焦点の定まらない視線を男に移してから、血の混じった激しい咳を繰り返した。

「いいえ、諦めません。この人は生きたいと強く願っています。ですから――私も諦めません」

強い眼差（まなざ）しで、蒼月は叱るような口調で話したが、彼女に薬師（くすし）のような知識や経験があるはずもなかった。

事実、この男の言う通りなのだ。整った医療施設など、まだこの星の何処にも存在していないのだから。

唯一出来ることは、彼の最後を看取り、独りではないのだ、と安心させてやること――少年の手を握り、蒼月は無力感に打ちのめされるしかなかった。

（――人々の病を癒す力が欲しい。
自分の命は、もう自分だけのものではないわ、私は一度死んだ身なのだから――。
“願い”が叶うのなら、自分が持っているものなら、どんなものと引換えてもいい。
仏さま、どうか私に御力を貸して下さい。
私の心に宿り――私の命をお使いください――）

『いずれあなたなら出来るわ。でも今はまだ――』

『おまえの決意は本当か？』

男女の荘厳な“声”が脳裏に響くと、蒼月は星々が煌く虚空の中に立っていた。
瞳に映る見たこともない光景に慄然（りつぜん）とする。
天と地、上下を失ったような目眩（めまい）を覚えた。辺りを見回すと少年や人々の姿が消えている。

眼前に無数の金銀の光が集まり凝縮してゆく。
光が一つの像を結ぶと、長い金色の髪を靡かせ、麗人が立っていた。慈愛に満ちた端整な顔立ちは、どこかこの世のものではない、夢のような雰囲気を漂わせている。

蒼月は弾かれたように膝を折り、恐懼（きょうく）して麗人に手を合わせた。

「わ、驚かせてごめんなさい。初めましてアオツキちゃん、私の名はラファ。
えっと――そんなに畏(かしこ)まらないで。私は、あなたたちを守護したいと望む存在に過ぎませんから。
私とあなたは何も変わらない。かつて私も、あなたのような存在でした」

麗人は腰を屈めて蒼月の手を取った。おそるおそる蒼月が見上げると、ラファと名乗った女性は驚いたように目を丸くしている。

「――ごめんなさい。私の親しい人の昔の姿に、とても似ていたものだから」
どう返答して良いか分からず、蒼月は目を伏せることしか出来なかった。

「えっと――理解できなくていいから聴いて下さい。
私はこの世界と異なる別々の場所に、同時に複数存在することが出来ます。ですから、この世界であなたに、”癒しの力”を貸してあげられる。
でも……あなたが誕生する前から守護しようと決めていたわけではないから、少し時間がかかります。
受け手のあなたに同調し、親和してゆく時間が必要なの」

「どれくらいの時間でしょうか？」
蒼月は、真っ直ぐラファの目を見て尋ねた。

「かなり上手くいって――あなたたちの世界で十年というところでしょう」
「それでは……あの男(おのこ)は」
「ごめんなさい――今の私には、直接干渉するような力はないの―

―私はもう、エルではないから」
ラファはいたたまれないというように唇を噛んだ。

「……全く手が無いわけではない。俺と――契約を結ぶならな」
背後から響いた思念の”声”は、聞き覚えがあるものだった。昨晩聴いた星神さま、と蒼月は振り返った。
何かを期待していたのだろうか、蒼月は予想していた何かとの違いに、身を固くした。男は拒絶するような鋭い視線を送ってくる。
すらりとした長身、銀色の髪、血色の悪い貴公子然とした容姿――氷のような雰囲気。

「どんなものと引換えてもいい、とおまえは望んだな。
かつてエルだった存在を二つ呼び寄せるほどの尋常ならざる強い思念で。
俺なら、おまえの望みを容易(たやす)く叶えてやることができる。
――ただし、代償は高く付くがな」

「代償？」

「おまえはこの世に希望をもたらす者になりたい、と望んだ。
それはあの場に蓄積された思念と合致し、俺は誓約を履行した。ただそれだけのことに過ぎん。
俺は救いの神でも、おまえの信じる”仏”とやらではない。むしろその対極にあるものかもしれん。

おまえの望みだ、その成就を欲するなら、おまえから相応の代償を頂く。

一つ。おまえはこの世界にある限り、愛する男と結ばれてはならない、身も心もだ。

二つ。おまえの願いを引き継ぐ者が現われた時、おまえは生きながら身を焼かれるような最後を迎える。

癒しの力だが、息絶えた者には行使できない。
癒しを受ける者が拒絶している場合も、その”効力”は発揮されない。また力を受ける者が治癒を強く望んでいない場合、その効力は著しく弱まる。
――人は、”死にたい”、”病になりたい”という自由も持っているということだ。

治癒の方法は簡単だ。ただ触れて強く念じればいい。おまえなら問題なく出来るだろう。
但し、行使できる時間は、おまえの肉体と精神の強さに比例する。一度に”力”を使い過ぎれば、おまえの肉体も危うくなる。

最後に、おまえの誓約が破られた場合だか、おまえが癒した者すべて、直ちに命を失うことになる」

男は提示した”契約”の内容を蒼月が理解しているか、確かめるように言葉を切り――正確に表現すれば思念だが――ゆっくりと話した。

身も心も――薔薇色の薄い唇から、蒼月は男の口にした言葉を形

作り、声にした。
潔癖な少女らしく、妙な表現を強調する、と少し不快に感じたが、自分にとって提示された条件は、些細な問題に思えた。
どこかの男の妻になる？――また売られるためにだろうか――想像するだけで、胸が苦しくなる。
生きながら身を焼かれる――そもそも一度死んだ身なのだ、安心して願いを託すことが出来る者がいるなら、思い残すことはないだろう。

蒼月はもう一度男の出した条件に思いを巡らせ、自分に言い聞かせるように頷いた。後悔しない、そう決心した。

「結構です。――いいえ。そのようなことで願いが叶うなら――ありがとうございます」
深々と頭を下げた蒼月を、ラファが心配そうに見つめる視線に気付き、男はくつくつと笑う。
ラファは形の良い眉をわずかに顰（ひそ）めた。

「聞いたか？　ラファ、おもしろい娘だとは思わんか。よかろう――契約を結んでやろう。こちらに来い」
男は低い声で呪文のような詠唱を始めた。その声が大きくなるにつれ、蒼月の眉間に激しい痛みが襲った。それでも奥歯を噛みしめ、じっと堪（こら）えていると瞳の色が男と同じ銀色に変わってゆく。
「おまえの見るものを、俺も見ている。片時も離れずな。――手遅れになる、さあ行け」
思いつめた目で頷くと、蒼月の姿は漆黒の闇に消えた。

ラファは、しばらく足元に浮かぶ蒼い星の――その中に浮かぶ小さな島国の中央辺り――エーテル体と呼ばれる蒼月の意識の核が降下していった場所をじっと眺めていた。そして起き始めた”変化”を確認すると、喜びとも哀しみともつかない感情で瞳を潤ませた。彼女には、かつてそのような経験を共にした親友がいたから。

「――すごく強くて、純粋なキラキラした思念。
蜘蛛の巣みたいに、もう金色の思念の糸が、彼女のいる場所の辺りに張られ始めてる。
その想いが人々の心に共有されてゆき、ゆっくりと世界を変えてゆく。

――人々にあの思念の糸が見えたら、とても素敵なのにね。
彼女が知っている場所、彼女の知る”世界”だけにしか伸びてゆかないから、まだ芥子粒みたいな広さだけれど、きっと――」

不機嫌そうな男を微笑して見つめ、ラファは口を開いた。

「お久しぶりですね、ルキ。
近々、再会するだろうと覚悟はしていましたが、まさかこんなところとは、思っていませんでした。

――随分、見違えましたね。

私たち精神体は、守護する者の経験を自分のものとして得ることで更に意識を拡大し、力を強めてゆく。守護する者の思念が強いほど、自らの力は蓄積されてゆく。

――どうやらあなたは、その中で”絶望”ばかりを好んで集めているようですね」
男は俯いて何も答えないが、ラファは柔らかい笑みを崩さない。
「片時も、離れずか。あなたが、そんな気の利いた台詞が言えるなんて知らなかった。
驚いちゃった――ちょっと嫉妬しちゃったかも。ずっと私が欲しかった言葉だったから。
もう、そんな顔しないで。昔の私じゃないから、いきなり抱きついたりとか、しないよ」
「くだらん――昔話など」
男が不快げな表情で吐き出すように言うと、ラファは込み上げる感情を無理に抑えるように、溜息を一つ吐いた。
「――なんかタイミングがいいんだが、悪いんだか分からないよね。待ち望んだ日が、よりによって最後の戦いの前だなんて……。
――でもアイネは、アイネたちは、ソウルテイカーに――『眠り姫』に勝つよ。
アイネはコウと結ばれ、やっとツインソウルに目覚めてくれた。
美夕は、スサノオシステムの切り離しに成功し、既にアマテラスで巻き返し始めてる。
――美夕にはね、エルだったころの同志、今はリンって言ったかな、『ラファ』のリンが守護してるのね。今もね、時々、お話してるの。
もう勝敗は決したと思う。

ルキ――彼女に言ってあげたら？
世界を壊しても、必ず復讐を遂げるという想い、かわいそうだと思う。でも彼女が愛したケイスケが望んだこと、ケイスケが『眠り姫』に望んだ最後の想いは、幸せになって欲しいということ。

――彼女がしようとしていることって、その反対じゃないのかな。ケイスケを取り戻す方法は、他にあるよね。かつてエルだったあなたなら、よく知ってることだよね？」

「俺はあの女と、そのような誓約を結んではいない。俺は誓約者の願いを叶えるために行動し、その見返りを得る。力を回復するためにな。ただそれだけだ」
　男の突き放すような物言いに、そっか、とラファは唇を動かした。かつて彼女がそばにいた人は、決してそんな冷酷な言葉を口にする人ではなかった。

「アオツキちゃんだっけ、なんかミカを見てるみたいだった。昔みたいに――三人で集まって。
あの子たち、私たちみたいになるのかしら？
てことは、さしずめ私は、少年の隣で泣いていた女の子だね。

――ルキは世界より、アルマルトシーヤの使命より、ミカに”自分”を選び取って欲しかった？
ごめんなさい――昔話は嫌いだったね。じゃあ私、行くね」
　立ち去ろうとして背中を向けた男に、ラファは涙声で叫んだ。
「大事なこと、言い忘れるところだったよ！
あの時の気持ち、言えないでずっと後悔してたから！

……私は、あなたの信念に同意できないと思った。だからラファの同志とあなたの行動に加わることはしなかった。私は――あなたとも、ミカとも戦いたくなかったから。

私はエルのラファを抜けて、独(ひと)つの守護精神体へ戻った。

あなたにとって――ミカ、エルのラファの同志にとって、私は裏切り者なのかもしれない。それでいいと思ってる。

――でもね、一つだけ、誇りを持って言えることがあるよ。

私はあなたと出逢ったあの日、十七歳の頃からずっと変わってない。愛してるよ、ルキ――永遠にね」

ラファの体から金銀の光が拡散して姿が消えると、辺りには男が放つ、冷たい闇の気配だけが残った。

◇▼◇▼◇▼◇

004

少女は、それまで泣くことしか出来なかった。あきらめることしか知らなかった。
兄に面差しの似た少年、ユウキが息絶えようとしていた時も、少女は泣いていた。しかたない、あきらめるしかない、と。
しかし蒼月が明星のような瞳を煌かせ、自分の手を包むように握った時――全てが変わった。

“捨てられた民”の者から、少女は菖蒲と呼ばれている。
菖蒲は、かつて大帝が都を置いた山江ノ国――その北の国境に位置する山涯という僻村で百姓の子として生を享けた。
都富士と称えられる龍神山の山脈が重なりあって青く聳え、霞んで八雲立つ空と溶け合う雄大な姿――龍が棲むと語り伝えられる、繻子の衣をかけたように白く流れ落ちる龍神の滝――記憶から描き出される故郷の姿は、錦絵のように美しい。

菖蒲が生まれ、物心ついた頃には、毎年のように戦が続いていた。お婆さまの生まれた頃にも戦があり、それから絶えることなくずっと続いているという。
（女子が考えても詮ないことやけど、
“戦”って、人がこの世にある限り、続いてゆくもんなんやなあ。
猿や鹿も喧嘩はするけど、ここまで容赦のない、むごいことはせえへん。
――人より獣の方が、もっと上等な生き物やないやろか？）

たしかに安寧（あんねい）な世というものを知らぬ人々にとって、戦（いくさ）のない世界とは、おとぎの話の中だけに存在する桃源郷（とうげんきょう）のようなものに違いなく、菖蒲がそういった素朴な疑問を抱くのは無理もなかった。

厳しい寒さの冬、村には冷たい山おろしが吹きすさぶ。

すきま風が入り込むボロ家では、薄い布団の中は凍えるように冷たくなった。

まだ幼い頃、菖蒲は母の布団にもぐり込み、抱きしめられるようにして眠った。隣の夜具では年の離れた兄が微笑し、暖かい眼差しで自分を見つめている。そうして家族で身を寄せ合っていると、まるでおとぎ話に出てくる”お姫さま”にでもなったようで、自分がこの世で一番幸せな娘だと実感できた。

菖蒲は、薄い布団の中で、一つの”おとぎ話”を母によくせがんだ――”戦乙女”の物語。

遡（さかのぼ）ること五十年ほどむかし、戦乱と病に苦しむ民衆を救うため、日ノ本各地を巡った高徳の僧がいた。僧が入滅しようとする際、安らかな笑みを湛（たた）え、夢うつつでみた幻を弟子に向けて語った。その弟子の僧らによって、口伝で日ノ本各地広められたお話である。

……羽のような雪が降る払暁、背の高い美しい天女が、心優しいお殿様の元に降臨する。

やがて二人は恋に落ち、天女は刀自（とじ）に迎えられる。お殿様と戦乙女は、悪い侍たちを懲らしめ、やがて安寧な世が――世に希望がもたらされる。

菖蒲は、天女がお殿様の元から去ろうとする場面では、いつも不安になって母に抱き付き、天女が悪い侍を懲らしめる場面では、白

い頬を赤らめ、小さな手を打って喜んだ。

しかし成長するにつれ菖蒲が見たものは、悪い侍たちが貧しい民から、血の一滴まで奪い尽くす姿だった。心優しいお殿様も天女も現われることはなかった――そう、ただのおとぎ話。

菖蒲は父の顔を知らない。

父は菖蒲の生まれる前に戦で足軽に取られ、戻ってこなかったと聞かされている。七つ歳の離れた兄が、父代わりだった。しかしその優しい兄さえ、十八になった年、父と同じように足軽に取られ、戻ってくることはなかった。

（――戦なんて勇ましい言の葉で装(よそお)うても、欲に目のくらんだお侍同士の、人殺しのことやないの。

なんで優しい兄(あに)さまが、無理に戦(いくさ)に駆り出され、死ななあかんの？

なんのために？　誰のために？）

母と祖母は「お殿様の命令にさかろうたら、村のもの皆に迷惑がかかる――だから、仕方ないのやで」と泣いて言う。

菖蒲は泣いた。涙が枯れるまで泣き抜いた。

泣き抜いて――初めて人を憎んだ。敵方の侍を憎んだ。戦に明け暮れる山江の殿様を憎んだ。自分たちの前に姿を現わそうとしない、おとぎ話の優しい殿様と戦乙女を憎んだ。

（聖人(しょうにん)さまは罪な御方や。

ほんま大嘘つきや！

子供に聞かせるような、おとぎ話でわたしらを騙(だま)して――）

兄を亡くして三年後には、日照りがやって来た。

野山にはうだるような熱気がこもり、一月ものあいだ一滴(ひとしずく)も雨が降らず、命の源たる龍神川はみるみる痩せ細っていった。

菖蒲は村の者と共に、龍神様の社にある泉から、夜を徹して稲田に水を汲んでそそぎ、青い稲を守ろうと働いた。しかし努力は報われず、稲や作物は全て立ち枯れてしまった。

豊作の年でさえ楽ではない暮らしだというのに、天まで自分たち百姓を痛めつけようとする。このままでは、飢饉がやって来るのは菖蒲の目にも明らかだった。

（――天のなされることやから、恨んでも仕方あれへんけど）

ささやかだが龍神さまの助けがあった。隣村に商人(あきんど)がやって来たのだ。

「山江ノ国を獲った新しい殿様は、滅法(めっぽう)戦が強く、都は復興の兆しを見せ始めておる」

なにやら都の中に”色町”というものができ、非常な賑わいをみせているという。白拍子(しらびょうし)という歌い舞って、侍の相手をする女子(おなご)の見習いが必要だ、と商人は言った。器量良しで、賢い娘だけしか勤まらぬ。そこでは毎日白い米を食べ、美しい小袖を着て暮らせる。

……本当なら、夢のような話だと菖蒲は思った。地獄に仏とは、まさにこのことやわ、と。

商人から家の者に渡される銭の相場を聞き、菖蒲は更に驚いた。年貢を銭で納めても、母と祖母がその年食うに困らない額だったからである。

ご来光に手を合わせてから、村の社にある龍神様の泉で身を清め、一番つぎの少ない着物を着て、菖蒲は商人たちが集まる隣村へ歩いて向かった。

集まった値踏みする商人たちは、娘たちに一指(ひとさ)しなにか”歌舞”でも見せてみろという。

（蕪(かぶ)？

かぶは冬のものやから、今の季節はあらへんし。

――そんなことも知らんて、この人ら、あほやろか）

蕪を薄く横切りし、果実と酢で甘酸っぱく漬けた香の物は、山涯の特産品とされているもので、菖蒲はこれを漬けるのが得意だった。

娘の中で一人、美しい小袖を着たものがいた。見たこともない顔だったので、旅の一座の者らしいと目星がついた。その娘が、商人たちの前に進み出て、歌いながら舞い出した。

そこにいたって「どうやら歌って舞う」ことなのか、と菖蒲は理解した。

知っている踊りといえば、盆に村祭りで踊るものしか菖蒲は知らない。歌うことは幼い頃から好きで、畑仕事の合間(あいま)などに兄や母の前で歌うと、いつも褒められた。

旅の娘の歌舞が終わると、菖蒲も「歌います」と商人たちの前に進み出た。胸から心の臓が飛び出すのではないかというくらい、動悸が激しくなった。

菖蒲は履いていた藁草履を脱ぎ捨て、祈るような表情で歌い始めた。龍神さまと兄さまに一身に祈りながら、村に伝わる童謡(わらべうた)を高い澄んだ声で歌った。

わたしのいとしい兄(あに)さまは　わたしのほつれた黒髪を
きれいといって梳いてくれた

わたしのいとしい兄さまは　垢にまみれたしろい手を
きれいといって好いてくれた

戦(いくさ)で死んだ兄さまは　わたしがながす涙かて
きれいといってくれるやろうか

わたしのいとしい兄さまは　土へとかえって稲穂に変わる

わたしの涙は川へとかえり　海へとそそいで　魚(うお)へと変わる

金の稲穂と銀の魚、社(やしろ)のましろい皿のうえ、

紅いとんぼのあぜ道の　肩車する兄妹(きょうだい)は、

まあるい皿でなかよく並び　あの日のように笑うやろうか――

集まった娘たちの中で、菖蒲は一番の高値を付けられた。自分は運が良いと菖蒲は思った。竜神様と兄様が護ってくれたお陰やわ、と。

実際、菖蒲は運が良かったのかもしれない。菖蒲の買い手――色町で一番の商人と目されていた男は、約束通りの銭を支払った。菖蒲に、名のある白拍子になる可能性を見出(みいだ)し、熱心に仕込むために

は、ここで恩を売っておくのが得策だろうという算盤を弾いたためではあったが……。

泣きじゃくる母と祖母に銭を渡し、菖蒲は商人と都へ向かった。母と病気がちの祖母を残してゆくことがつらく、涙が止まらなかった。しかし手をこまねいて待っていても飢えて死ぬだけだ。だから――しかたない、と思った。

（兄さま、どうか母さまとお婆さまを守って――）

005

菖蒲にとって、都での暮らしはおおむね恵まれたものとなった。

都人(みやこびと)には信じられぬほどの幸運の類であったろうが、僻村の百姓の娘に過ぎない菖蒲には、ただ本人が覚悟していた以上の辛いことはなかったということに過ぎなかったが。

世に稀(まれ)なる謡(うた)いの天稟(てんぴん)の持ち主であると女衒(ぜげん)に認められた菖蒲は、客に身を売る遊女(あそびめ)の苦界に落とされることなく、名のある歌舞の師匠のもとで、日々稽古に専心した。

菖蒲は、当時の下々の娘たちの憧れであった芸妓(はおり)を目指す者となったのだ。

稽古の厳しさは、うっかり間違えれば怒号が飛ぶ容赦ないものだったが、体罰を加えられることはなかったし、食事、休憩、睡眠は十分に与えられた。三度の食事の際、膳に並ぶご馳走や、休憩に振舞われる汁粉などといった頬が落ちそうな甘い菓子、贅沢というものを味わったことのない菖蒲は、感激さえした。

ただそういった見聞きしたこともない美味なものを食すると、母さまやお婆さまと分け合って食べたら、どれほど幸せだろうと菖蒲は望郷の想いにかられるのだった。

（母さま、お婆さまにも、これ、食べさしてあげたいわ。ちゃんとご飯、食べてるやろか――）

その頃、都では龍王院(りゅうおういん)　義長(よしなが)という大名が畿内七カ国を併呑し、日の昇る勢いを有していた。

荒廃した都を熱心に再建する姿から、民草からは”天下さま”と呼ばれ、通りの隅々に復興の喧騒(けんそう)と活気が溢れ始めていたのである。

菖蒲を見出した、色町で一番と目された女衒の”目利き”は、確かなものだった。

菖蒲は血の滲むような厳しい稽古を経て、年に一度行われる御殿試験という歌舞の試験に合格し、芸妓御殿（はおりごてん）の見習いに加えられる栄誉を得た。謡いの席次では、”天下さま”から直々に賞賛の言葉を賜るという上天、つまり首席であった。

菖蒲は、商人が故郷の母に支払った額の百倍の銭に化けたのである。

芸妓御殿（はおりごてん）とは、金回りの良くなった都に”天下さま”の命令によって作られた、ある種後宮のような施設であるといってよい。身分の高い侍の相手をする白拍子――ありていにいえば高級娼婦のような類の者であろうか。

出自は問われぬが、侍たちの気を逸らさぬ高い教養、抜きん出た美貌が要求される。それだけに男尊女卑の封建的社会であっても、風流、雅（みやび）を体現する文化人、職業としての地位を認められていた。

何より“天下”さまの下で槍働きをする武士にとって、芸妓御殿に立ち入りを許されることが一廉（ひとかど）の侍であると主に認められた証であった。その中で気に入った芸妓を妻に迎えることが、家臣団の中で立身出世の一つの達成とみなされていたのである。

菖蒲は、芸妓（はおり）の見習い娘として、歌舞や音曲だけでなく、熱心に読み書きを習った。

菖蒲はそれまで字というものを知らず、墨で書かれた黒いみみずの群が、意味をもった言葉となって変化してゆくのが、新鮮な驚きの連続だった。墨のみみずが、故郷の花や風景、男女の恋物語となって、頭の中で次々に鮮やかに描き出されてゆく。

（字が読めたら、会ったこともない偉い人の考えや経験を知って、私やったら、どうするやろかって、自分の頭で考えられる。すごいわ――もっともっといろんなものを読みたいな）

当代きっての一流芸妓・”白百合”の部屋付き見習いとなった菖蒲は、生真面目で素直な性格を見込まれ、妹のように可愛がられた。そして白百合に、”菖蒲”と名付けられた。

姉さま――白百合の出自は庄屋の娘だったそうだ。”傾国の美”と都人（みやこびと）に称えられるほどの麗人である。

肉付きの良い身体は、抜けるように色が白く、ぽってりとした厚い唇は男を惑わせる匂うような色香を放っている。しかし特筆すべきは、妬みや嫉みが渦巻く女の城の中でも全く損なわれなかった、柔和で慈悲深い人柄である。

菖蒲は、姉さまの怒った顔を見たことがない。他の芸妓なら、棒で打ち据えられるような失敗も、

「あら……。どこも怪我は無かった？　菖蒲はいつも元気で可愛いわね」と、微笑して許してしまう。

恵まれた境遇は、龍神さまのご加護の賜物であると、里の方角へ朝夕の祈りを欠かさなかった菖蒲だったが、ただ一つ不安なことがあった。

細々とした姉さまの身の回りの世話を任された菖蒲は、女と男の”こと”を何度か目にした。

二匹の蛇が絡（から）み合うような姿に驚き、いずれあのようなことをせねばならぬのかと物憂（ものう）く思った。だが一人前と認められ、一廉（ひとかど）の侍大将の寵愛を受ければ里に仕送りも出来る。

いずれは自分も殿方のために果たさねばならぬ勤め――仕方ない、と思った。

女子ばかりの御殿で、意外な友人も出来た。“胡瓜”と呼ぶ年上の青年との出逢いである。

娘たちが配膳に勤(いそ)しむ台所を物珍しげに検分している姿を菖蒲が大声で注意したのである。

「そこの胡瓜みたいにひょろっとした男！　ここから出てゆきなさい！」

端整な顔立ちだが、背が高く、青白い肌の男だったから、つい胡瓜と口走ってしまったのである。ただ見習いとはいえ、御殿の中では、芸妓と供の若侍などでは、幾らか芸妓の立場が強い。

厠(かわや)などに中座した供の者が迷ったのだろうと菖蒲は見当をつけ、若者が目指す座敷に案内してやった。

「おお、確かにこの座敷ぞ。かたじけない。して……おまえの名はなんという？」

「……あやめ。あんた本当にお侍？　噂になってる”ねずみ”とかいう物盗りやあらへんやろうね。

――まあでも、”ねずみ”とかいうよりは、”きゅうり”やね。こんなひょろひょろした青白いお侍って初めて見たわ」

「ほう、俺は、そんなにひ弱に見えるか」

値踏みするように見る菖蒲に、しょげたような口調で青年は言った。

「うん。悪いけど、めちゃくちゃ、弱そうやわ」
「ふむ……。確かに子供の頃から、病気ばかりしておる」
考え込んだように青年は答えた。

「お日さまの下で野良仕事でもしてみたらええわ。今の季節なんか、すっごい気持ちええんよ」
「なるほど、百姓仕事を検分してみるのも、良いかもしれんな」
「あほ……見るんやなくて、鍬をもって、やるの！」

この胡瓜と呼ばれた若者は、身分を偽って初めて御殿に渡られた天下さまのご嫡男”義宗公”であった。供の小姓や侍などが御殿でうろつき回れば、主（あるじ）にたちまち手打ちにされる。他の芸妓が声をかけなかったのは、口に出さずとも、高貴な人であろうと推測したからである。菖蒲が世間知らずというか、無邪気というべきか……。

一人前の芸妓になろうとする菖蒲の熱心な姿と、自分に対するずけずけとした物言いを、義宗公は愉快だと感じたらしい。菖蒲を気に入ったのか、以後も身分を偽って御殿に出入りするようになったのだが、それが縁で姉さまを見初め、義宗公と白百合は愛しあうようになった。相思相愛、似合いの仲睦まじい一組の男女であった。
白百合と菖蒲は、きゅうり殿の正体を知ったのち、義宗公を”きゅうりの若さま”と呼んだ。

一年が瞬く間に過ぎた。
菖蒲の女としての色香は綻（ほころ）び始め、羽毛の僅かな愛撫でさえ、花を開こうとする可憐な蕾のようだった。しかし菖蒲が芸妓御殿に一輪の花として活けられようとした頃、大乱が起こった。
御殿の主である天下さまが、一人の重臣（おとど）による突然の謀反（むほん）によって、自害されたのである。

……発端は、天下さまが大きな合戦において抜群の戦功を上げた重臣に与えると宣した褒美を与えず、約束を反故にしてしまったからだと噂されている。

その褒美とは姉さま――白百合であり、ご嫡男・義宗公のご執心（しゅうしん）を天下さまが哀れに思し召したからだとも……。

見習い娘の菖蒲に、噂の真偽など分かるはずもない。だが姉さまと義宗公が深く愛し合っている事実は、十分過ぎるほど知っていた。自分の命に代えても、なんとか姉さまを義宗公の城まで落ちのびさせねばと決意した。

都は、敵味方の区別なく、飢狼（がろう）のように武士たちが暴れまわり、紅蓮の炎に巻かれていた。

御殿の外に火矢が飛び交い始めたとき、女たちに一振りの短剣と黒い丸薬が配られた。言うまでもなく自害用のものである。息つく間もなく、芸妓御殿は阿鼻叫喚の地獄と化した。女たちは羊のように逃げ回るしかなく、弄ばれて命を落としてゆくしかなかった。

菖蒲は姉さまの手を取って逃げた。

しかし通りを挟まれるように侍に追いつめられたところで、姉さまは黒い丸薬を口に放り込み、奥歯で強く噛みしめ、吐血した。

「わがままでごめんね菖蒲……。もう、きゅうりさまに以外の誰にも触れられたくないの。来世で必ず――きゅうりさまと結ばれます……」

「姉さまのあほ……弱虫毛虫！」

「ごめんね……」

涎を垂らした侍たちの手が自分に伸びた時、炎を巻き上げる商家

が崩れ落ち、燃えさかる梁(はり)が男たちの頭上へ崩れ落ちた。
菖蒲は鋭い悲鳴をあげた。髪に火が燃え移ったのだ。
内掛(うちかけ)を脱ぎ捨て、衣を被り、転げまわるようにして火をもみ消した。こめかみと右頬に鋭い痛みを感じたが、無我夢中で炎の都を逃げ回った。
――気がつくと死条(しじょう)と呼ばれる界隈(かいわい)へ辿りついていた。
喉が渇いていることに気付き、浅瀬で川の水を飲もうとした時、揺らめく川面に映る異形のものに気付き、菖蒲は悲鳴を上げた――水鏡に映っていたのは、右半分が赤く焼け爛(ただ)れた自分の顔だった。
脳裏に黒い丸薬と短剣が浮かび、私も姉さまと兄さまの元にゆこうと考えた。
（もう疲れたわ…兄さま、姉さま……）
短剣の刃を白い喉に突きつけようと目をきつく閉じて構えたとき、誰かに短刀を払い落とされた。驚いて目を開けると、白髭の老人が短刀で鼻毛を切っていた。
「おお、驚かしてすまん。ちと鼻毛が伸びすぎておっての。むぅ、これはなかなか――鼻毛切りに最適じゃの。これを譲ってくれんか」
菖蒲は痛みを忘れ、目を丸くした。童のような艶のある肌と人を食ったような微笑、汚い袈裟(けさ)を纏(まと)っているが、伝え聞いた高徳の僧・佐治聖人(さじしょうにん)に似た姿だったからである。
「む！　ひどい火傷をしておるの。

そのままでは火ぶくれになるぞ。手当てして進ぜよう。目をつむっておれ」

老人は子供のような小さな手で冷たい油のようなものを塗り始めた。菖蒲の閉じた目から大粒の涙がぽろぽろと溢れ出た。

「失われし龍神の巫女の血脈の娘か……さぞ素晴らしい歌声じゃろうて。

――わしには可能性が見える……。

――そなたは刈り取る者。

種子を撒く者、育む(はぐくむ)者、それらの願いにやがて”成就”をもたらす者。

……諦めて投げ捨ててしまうのは容易(たやす)い。しかし……そこで、全ての可能性は絶たれる。

人の意志――願い……という賽の目は、集まり一つになれば、神仏さえも妨げることは出来ぬものなのじゃ……。

力の限り生きて、己(おの)が賽の目を振ってみよ。

おぬしが、一族に語り伝えられし真(まこと)の名を誰かに告げるまで、生きてみよ――」

(何を言っているの?

名前――なんでそんなこと知ってるの?

母さまに教えられた。夫(つま)になる男子にだけ教える特別な名前のこと――)

遠退いてゆく意識のなかで、菖蒲は泣きながら思った。

006

菖蒲が目を覚ますと小柄な老人の姿はどこにもなかった。

ぱちぱちと爆ぜる音を立て、焚き火の炎が揺らめいて踊っている。

体のいたるところに痛みがわだかまっていた。もっとも痛むのは額から頬までのもの――顔の右半分。

（……夢やったんやろか）

ゆっくりと体を起こすと、足元に金色の油で満たされた小さな白い壺が置かれている。その中から懐かしい香りがした。

（これ、かんらんをしぼった油やわ。夢やなかったんや）

故郷の村では、赤子が生まれると額と足にかんらんの油を注ぎ、龍神さまの加護を受けられるように、と祈願する風習があった。擦り傷や火傷、腹痛、唄が上達するようにと飲む者さえいる――何にでも効用があると信じられ、祭りなどの宗教的儀式には欠かせない珍重されているものなのだ。

幼い頃、菖蒲が怪我をして泣きべそをかいていると、祖母や母、兄がよく手当てをしてくれた。優しかった兄の肌の匂いを感じたような気がした。

「――かえり…たい……やまはてへ……帰りたい……兄さま、お婆さま……寂しい……こわい……」

菖蒲は泣いた。望郷の想いに駆られて、武士たちへの恐怖、姉さ

まを失った悲しみに耐えかねて。

自分がいったい、どんな悪いことをしたというのか、これは何かの罰なのだろうか。辛いことを考えないようにして、人の悪いところ、醜いところを見ないようにして、ただ自分の出来ることを精一杯がんばってきただけだというのに。どうして、このような酷い目に遭わねばならないのか。

兄さまも姉さまも、優しい、心のきれいな人だった。それなのに――それなのに――なぜ、菖蒲は泣いた。涙が枯れるまで泣き抜いた。

（かえりたい、やまはてへ――みんながいてる美しい村へ）

朝靄のなかに、太古の巨大な獣骨のように、崩落した橋梁、”死条橋”の残骸が浮かび上がっていた。

菖蒲はそれから死条に住み着いた。

死条は“くずれ”や労咳――人々が恐れる伝染性の死病を患った者が捨てられる場所だった。そこで”くずれ”の人々と同じようにぼろ布の頭巾を被って顔を隠し、何も考えないように――何も想い出さぬように過ごした。

死条は、夜盗さえ近付かぬ忌み嫌われる場所である。菖蒲も御殿でこの辺りの噂を聞き、きっとこの世と隔絶された、冥府のような場所であると信じていた。

しかし実際過ごしてみると、この捨てられた者たちの場所は、都で最も安全な場所であった。人々は貧しいながらも、善兵衛という逞しい男を中心にして、助け合って暮らそうとしていた。
死病に侵された者、病によって姿がくずれた者たちの中だけに、安寧な場所があったとは――皮肉な世である。

しばらくして、菖蒲は”真厳寺の変”の顛末を”くずれ”の者から聞いた。

嫡子・義宗公は、姉さまが亡くなった日に自害に追い込まれていた。……”天下さま”と”義宗を討ち取った張本人である謀反人も、味方した他の重臣との主導権争いで命を落としたそうだ。

残った重臣の中にも、”天下さま”の後継と目される器量を持つものは存在せず、彼らのぶざまな内紛に乗じ、隣国の大名が攻め入ったことで、”天下さま”の軍勢は畿内から逃げ散った。

”天下”に最も近い隆盛を極めた龍王院家はあっけなく滅亡したのである。

都が紅蓮の炎に装われ、灰燼（かいじん）に帰した夜、あのひ弱にみえた“きゅうりの若さま”は――館の自室の畳に十七本の名刀を縫い針のように突き刺し、群がる雑兵を阿修羅のように切り倒したそうだ。
刃が切れなくなる度に新たな刀を引き抜き、刀が尽きると弓を引き絞り、矢が尽きると……貴公子は館に火を放った。

「――侍とは存外つまらん。
もう飽いたわ――来世は百姓でも楽しもうか」
貴公子は呵呵大笑すると、炎の海の中に姿を消したという。

義宗公の最後の話を聞いた菖蒲は、姉さまを慕うあまり、無意識に自分が秘めていた感情に気付いた。
それは淡い――あまりにも幼い、きゅうり殿への恋慕の情だった。自覚さえ出来ぬうちに失った初恋の人。

（せめて、蓮の花が咲き乱れる極楽で姉さまと結ばれて――もう誰の邪魔も入らへん極楽で）

菖蒲は、死条で数えきれぬ者の死を看取った。
その度に、諦めの涙を流した。世の無常――この世には苦しみと哀しみが満ち満ちている。

何故、人は苦しみ抜き、死んでゆかねばならないのか。人とは苦しむために生を享けるのだろうか。

幼い頃、悪いことをした者は地獄というものに堕ちると菖蒲は聞かされた。でも、と菖蒲は思う。
自分がいるこの世が”地獄”なのではあるまいか？
ならばこの世に生まれた者たちは、全て罪人なのだろうか？

ぐるぐると思い悩んでみたが、答えは出なかった。地獄の亡者のように火傷を負った顔では、死条を出てゆく決心も出来ない。

菖蒲は、死条でひたすら死にゆく者の世話に明け暮れ、泣きながら眠るしかなかった。

菖蒲にとって、”生きる”ということは耐えることだった。涙を流すことだけが、与えられる苦しみから、自分の心を守る唯一の術だった。

――しかし、何かが変わろうとしていた――蒼月を見つけたのは菖蒲だった。

屍を求めてうろつく野犬の遠吠えが響く夜更け、帯刀した三人の身分の高そうな男たちが、辺りを気にしながら、崩れ落ちた死条橋の袂（たもと）にやって来るのを見つけた。

菖蒲は、戸板の上で息も絶え絶えな少女の美しさに息を飲んだ。おとぎ話の中に出てくる天女のような美しさ。

蒼月が死の兆候を見せ始め、くずれ”の病にかかった人々が、お経を唱え始めた時も、菖蒲は諦めて泣いた。

（もうあかん。もう――ながくあれへん）

やがて瞳の焦点が定まらなくなったとき、少女は自分に”ありがとう”とお礼を言って微笑んでくれた。

菖蒲は泣いた。死を目前にした者から、礼を言われたことなどな

かったからだ。
このような世の穢れとは無縁のような人でさえ、やはり助からぬのだと――菖蒲は涙を流した。

……冷たい何かが肌に触れ、弾けた。

夜空を見上げると死条の穢れを祓うように、純白の雪が降り始めている。
羽毛のような純白の雪――幼い頃故郷で何度も聞いたあのおとぎ話のような雪。

刹那、顔に引き攣るような激しい痛みを覚えたが、少女の顔に現われた死相が打ち払われ、血色が良くなってゆく様子から目が放せなかった。

“くずれ”を病んだ者の一人から、驚きの声があがった。
「おお、おぬしの顔、治っておるぞ！」

ぼろ布を被っておらぬ者”くずれ”の者の顔が、元通りに癒えていた。皆、次々とぼろ布を取り去って確認すると、すっかり傷が癒えているではないか。

菖蒲も川の浅瀬まで走った。水鏡に映る自分の姿はすっかり火傷の傷跡が消え、白百合――姉さまのようにつややかに輝いていた。
驚きで声さえ出せなかった。

その夜、菖蒲は興奮して眠ることが出来なかった。

自分は紛れもない奇跡を目の当たりにしたのだ。
美しい少女は、天女ではないだろうか。払暁に煌く明星を眺めながら、おとぎ話に思いを馳せた。

一睡もできなかった菖蒲は、ご来光に手を合わせてから、蜆狩りに出かけた。僅かだが岩塩を持っていたから、少女が目覚めたら温かい澄まし汁を振舞ってやりたいと思ったのだ。
これほど胸が弾むような、清々しい気持ちでご来光を見つめたのは、いつだったろう、菖蒲は思いを巡らせた。
「――そう、やまはての――お祭りの朝やわ」

足裏に流れる冷たい水が心地よかった。
注意深く川面を覗き込んで蜆を探しながら、水鏡にうつる自分の顔を何度も確かめていた。

（わ、ぎょうさんいてる。
御殿でなろうた美味しい澄まし、作れるわ）

菖蒲は目を見開き、口許に手を当て言葉を失った。
笑っている――今、水鏡に映った自分は、故郷に咲くひまわりのように、明るく笑っていた。

一刻ほど夢中で蜆をとると盥に一杯になった。
空模様が怪しくなり始め、ぽつぽつと雨が降り始めた。
降り出した雨を避けようと死条の橋へ戻ろうとしたとき、稲光のような閃光のあとに背後で落雷の音が響き渡り、菖蒲は思わず尻餅をついてしまった。

（わ、龍神さまのくしゃみやわ！）

もうもうと白い煙がたっている場所に目をやると、裸の男が仰向けに地面に横たわっている。走り寄って近付くと、それほど自分と年の変わらぬ少年が、血の混じった咳をし、苦しそうに喘いでいた。

男の顔を覗き込むようにして見ると、兄に面立ちが似ていると思った。菖蒲の心に、兄の面影がありありと浮かんだ。

幼かった自分の頭を優しく撫で、兄は戦へ向かった。決して人を傷つけるような真似が出来る人ではなかったのに。傷付き、一人で死んでゆくことは、どんなに孤独だったろうか。

どうしても――どうしても助けたい、と菖蒲は思った。

「少し待っといて！　人を連れてくるから！」

菖蒲は蜆を入れた盥を残して、死条の河原へ走った。

（天女様なら、助けてくれるかもしれへん！）

蒼月の手を引いて、”兄”のもとに菖蒲は懸命に走った。

（兄さま、待っていて。死なんといて！
ぜったい、ぜったい、助けてくれはるから――）

菖蒲は、蒼月を兄のもとに連れていけば、助けてくれると思った。じっと施しを待つ物乞いのように、ただ自分より大きな者の力にすがれば、それで救われるのだと。

しかし蒼月も、兄の手を取り、死を看取ることしかできないと分かると、菖蒲は泣いた。

もう――何も、信じない。望みを抱くから、苦しみは生まれるの

だ。

——蒼月は、じっと思惟(しい)するような表情で、しばらく目を閉じていた。次に長いまつげが蝶の羽ばたきのように瞬いたとき、少女の瞳の色は、明星が遷移したような色に変わっていた。

蒼月は、菖蒲を真っ直ぐ見つめて口を開いた。

「——あきらめないで。私に、力を貸してください。まだ私だけでは難しいのです。

——あなたの力が必要なの。

——あきらめないで、信じてください。

この人が助かると——この人が助かって欲しいと強く願ってください。

信じなければ何も変わらない——信じる、その想いは、一つに合わさった時、強い力になります」

菖蒲は頷いた。最後にもう一度だけ、信じてみようと思った。

蒼月に導かれるようにして重ねた二人の手が少年に触れると——熱となって想いが沁みこんでゆくのを感じた。

（兄さま、私は、あきらめへん。お願い、力を貸して――）

重ねられた自分の手に、ふわりと懐かしい感触のもう一つの掌（てのひら）が加わったように感じた。

『いとしい妹――おまえをいつも見守っているよ』

（兄さま、ずっと私のこと――見守ってくれてたんやね）

少年の表情が安らかなものに変わってゆく。

「ありがとう――もう大丈夫です。
あなたのおかげです。
あなたの力がなければ、この人はきっと助からなかったでしょう」

蒼月は微笑して頷いた。
その顔を見たとき、菖蒲は自分の心にずっと降り続いていた雨が、やっと上がったのだと知った。

菖蒲は泣いた。
兄に似た少年を抱きしめ、声をあげて菖蒲は泣いた。
しかし頬を伝った涙は、これまで菖蒲が流した冷たい涙とは全く違う。――心が透きとおってゆくような、ほんのりと暖かな、静かな涙だった。

いつのまにか雨は上がっている。灰色の雲間から、柔らかな光が降り注いでいた。

◇▼◇▼◇▼◇

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1072t/

名もなき異界の花たちへ

2011年7月17日11時10分発行